

『渋谷・実践・常磐松』を刊行して - I ~ 実践女子学園再認識の記 ~

井上 一雄

はじめに

今年2月『渋谷・実践・常磐松』の著書名を冠した著作を刊行した。その著書の帯封に「渋谷、変貌する今だからこそ、知っておきたいことがある。渋谷と常磐松地域、実践女子学園に焦点を当て、その過去を探りながら過去・現在・未来を繋いでいく書」と記した。

著作刊行後、幾つかの反響があったが、この『ニューズレター』に寄稿できることになったこともそのひとつで、今回はこの紙面をお借りし、拙著のエッセンス（実践女子学園と学園が存在する渋谷・常磐松地域の来歴や様々な特徴）の一端を絡めて、不思議な「学園再認識の記」を書くこととする。

人物で辿る実践女子学園の歴史と伝統 ～ 私的体験と執筆過程で判明したこと ~

私的体験～明治生まれの学習院女学部卒業生、 大正・昭和生まれの実践女子(学園)卒業生との「遭遇」

学園中高に赴任してから5年程して、初任校の元同僚（といっても、当時74歳）から次のような主旨の連絡が入った。“自分も年齢が高くなってきて、身の回りの物を整理し始めたら、自分の祖母が1907（明治40）年に学習院女学部を卒業した時の卒業証書が見つかった。発行者名は下田歌子。ついては、現在、実践女子学園に赴任しているあなたに送るので、実践女子学園に寄贈してもらいたい”とのことだった。連絡を受けた私は、さっそく学校長を通じて学園本部に連絡を取っていただき、貴重な卒業証書を保管していただいた。祖母の方の同学年には、大正から昭和にかけて舞台、映画、テレビで活躍した東山千栄子（本名 河野せん）もいたそうだ。

学園の「下田歌子」年表によると、1886（明治19）年に華族女学校学監に任ぜられていた下田歌子は、1906（明治39）年に華族女学校が廃止され、学習院女子部に改編された時も学習院教授兼女学部長に任ぜられたが、翌年には学習院女学部長を辞任している。したがって、下田歌子名で学習院女学部の卒業証書が発行されたのは、1907（明治40）年の1回だけということになり、学習院女学部長下田歌子名による卒業証書は最初で最後、唯一無二の110年前の卒業証書となるというわけだ。

また、今回の拙著を贈呈した、前述とは別の元同僚の

母親も実は実践女学校卒業だったという便りをいただいている。1918（大正7）年生まれで、今年白寿（99歳）を迎えるそうだ。

さらに、初任校の元同僚の話ばかりで恐縮するが、今年77歳になる家庭科教師や、退任数年前に着任した英語科教師も実践女子大学、同大学院出身であった。

執筆過程で「遭遇」した 実践女子学園卒業生と関係者

続いて著作の執筆過程で、はしなくも「遭遇」した3人の方を紹介したい。

①矢島 喜久（実践女学校の卒業生）

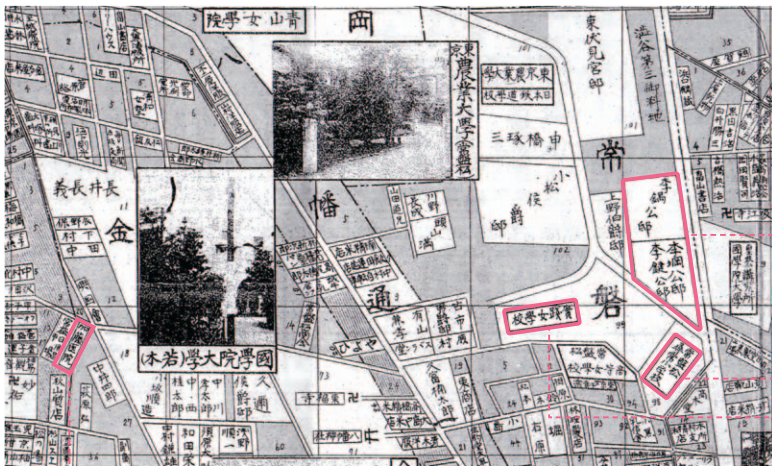
まず、最初の人物は、直木賞をはじめとした数々の文学賞を受け、昨年は文化勲章を受章した現在も渋谷区に在住されている平岩弓枝氏の伯母である矢島喜久氏である。平岩弓枝氏は、代々木八幡宮の宮司の一人娘であり、矢島喜久氏は、平岩弓枝氏の父親の姉に当たる鳩森八幡神社の後継者であった。

私の著作、第17話（「渋谷・実践女子学園と文学（作品）」）で取り上げているが、平岩弓枝氏は「作品と私のこと」の中で家族、親類のことを語っており、矢島喜久氏のことを述懐している。

「・・・千駄ヶ谷の伯母さん（筆者註：矢島喜久）は兄弟中でその秀才ぶりを、進取の気性を、文学性、あるいは趣味人としての多芸ぶりを認められていたということになる。・・・思い出の中の、千駄ヶ谷の伯母さんは、ちょっと近寄り難いようなところがあった。彼女は実践女学校を卒業して、日本銀行に勤めていたことがあるという。・・・学問好きで筆がたち、文章もよく書いた」として紹介されている。

②李 誠子（旧姓：松平 誠子、李氏朝鮮の末裔・李 鍵公の配偶者）

第17話（その1）で“知の巨人”といわれた加藤周一氏（1919～2008）の『羊の歌』に触れた。氏は大正14年12月創立の常磐松小学校1期生で、『羊の歌』の中で、実践女学校の女学生や彼の通学路であった金王町（渋谷2・3丁目）から小学校までの街並みの風情を情緒豊かに描写している。桜横町と呼ばれた通りには道の両側に老木の桜が植えられ、春には素晴らしい花をつけていたそうだ。その描写の中に、実践女学校と道を隔てた隣に李王



李 鍵公・
李 錮公 宅

実践女学校、
常磐松小学校

加藤周一氏が『羊の歌』で描いた常磐松小学校までの通学路の基点になった当時の自宅

出典：渋谷商工地図(昭和3年、東京交通社)



松平 誠子 氏
(当時21歳、朝鮮公族との結婚のため爵位が必要で廣橋真光氏の養妹・廣橋誠子となっていた)

出典：歴史写真会『歴史写真』(昭和6年12月号)

家があったことが記されている。この李王家こそが1910年の日韓併合後、日本の王公族として準皇族の待遇を受けた李氏朝鮮の末裔である李鍵公・李錮公(大韓帝国の初代国王、高宗の五男・李焜の長男と次男)の邸宅であったのである。私にとっては、加藤周一氏が何気に記した「李王家」が件の李王家であったことが驚きであったが、それ以上に不思議な感覚にさらされたのが、この邸宅の所有者である李鍵公の配偶者が旧姓松平誠子(最終姓名：松平佳子)という実践女学校卒業生だったことである。

彼女は高松松平伯爵家の分家出身で、1930年当時実践女学校に在学しており、関東大震災時の援助に対する遣米答礼使としてアメリカに派遣された経歴を持っていた。関東大震災発生後、米国は大量の食料と衣類等を日本に送ってくれた。その援助に対し、英語が話せる5人の令嬢が感謝を伝えるため「遣米答礼使」として1か月渡米したが、その中のひとりだったのである。

③飯沼信子(1932～)(作家、日本ペンクラブ会員、日本エッセイストクラブ会員)

拙著第18話「日本薬学会長井記念館と長井長義」で、六本木通りに面してある日本薬学会長井記念館と、加藤周一氏が『羊の歌』で「西洋人と私たちとのコミュニケーションの不可能の象徴だった」と表現した広大な長井邸の関係を、わが国におけるフィンランド領事館の事始めに絡めて読み解いた。それ自身が私自身の興味をそそる事柄だったのだが、そこに、さらに重ねて読み解く過程で不思議な因縁とも言うべき事柄に出会うことになった。長井邸のことを調べる過程で、『長井長義とテレゼ～日本薬学の開祖』を著した飯沼信子氏と「遭遇」することになったのである。飯沼氏も実践女子大学関係者であった。

『京都女子大学現代社会研究』で論稿「帰米二世との『国際結婚』-飯沼信子さんのライフ・ヒストリーを通して-」を著しておられる嘉本伊都子氏によれば、飯沼信子氏は、旧姓を長田信子といい、1932年静岡県沼津市

に二男四女の末っ子として生まれ、後に本人は国文学科志望であったが、実学志向の父親の勧めで実践女子大学文家政学部家政学科に入学した。その後、1952年大学2年生の時、常磐寮で後に夫となる帰米二世の飯沼星光氏と運命の出会いをし、翌1953年実践女子大を中退し、渡米することになる。時を置いて飯沼信子氏は、明治から大正期にかけて欧米で国際結婚をした人物を詳細に追ったノンフィクションを精力的に書き上げている。氏を取材した嘉本氏によれば、「卒業生とは扱われないために実践女子大学との縁が切れているが、母校でいつか講演をしたいと考えている」そうだ。

以上が、学園に縁がある人物を中心に紹介した寄稿であるが、私にとっては、拙著の執筆過程が図らずも実践女子学園再認識の過程にもなった。

最後に、紙幅の関係で今回触れられなかった拙著の主な内容をそのタイトルで紹介しておきたい。

< A5判 131頁。定価1,000円(税込) >

- ・実践女子学園周辺は縄文人の生活の場だった
- ・実践女子学園にまつわる話
『羊の歌』『渋谷のむかし』『明治事物起源』
- ・渋谷・実践女子学園近辺の過去を探る
- ・明治末期・昭和12、30年の地形図から
渋谷常磐松界隈を見る
- ・常磐松周辺にあった学校
- ・「渋谷」という地名の由来
- ・渋谷はなぜ坂が多いのか
- ・昔、渋谷川はどんな川だったのか
- ・尾崎豊とクロスタワー
- ・渋谷の戦災
- ・渋谷と文学者 大岡昇平、与謝野鉄幹・晶子、志賀直哉

(次号へ続く)

(いのうえかずお 実践女子学園中学校高等学校元教諭、
現 横浜富士見丘学園中等教育学校教諭)

下田歌子が二代目の校長を引き受けた淡海女子実務学校 - II

藤堂 泰脩

「淡海女子実務学校廃校の危機と下田歌子校長の就任」

淡海女子実務学校は、多くの方の指導を受けて学校として充実、発展し、教師や生徒数も増え地域から近畿一円にまで知られるようになった。その背景には、下田歌子や嘉悦孝に加えて、棚橋絢子、河口愛子(注1)という女子教育界、また東宮教育掛の杉浦重剛、京都帝大総長荒木寅三郎、野上俊夫、大島徹水等の強い後押しもあり、万全の形で発足されたことがある。

レベルは高く、当時一流の教授陣は時代としても先端を走っていたであろう。しかし、大正十二年九月一日の関東大震災の影響は、この淡海にも襲い掛かった。

さと及び塚本一族は、財政面で学校を全面的に支援してきた。初代が文化九年(一八一二)に創業した甲府から、明治五年以降、東京に本店を置き、事業も発展の一途を辿っていた。しかし、この未曾有の災害によって、本店はおろか近郊の販売先や取引先を失い、足踏みをせざるを得なくなった。ここで塚本一族は資本の集中化をはかり、再建に立ち向かった。学校支援も今まで通りには行かぬ事、それは中止せざるを得ない意味である。この時、さとは主人の源三も、頼るべき兄二人も亡くし、世代は次代へと代わっていた。さとは一人取り残されて、一族の意向と学校との狭間で苦しんでいた。

わが子同然の生徒達や巣立った卒業生の母校が無くなることは、生まれ育った生家を失うこととも同じと思いつつも、解決の糸口は見つからぬままの日々であった。この現状、廃校にせざるを得ぬことを下田、嘉悦の両顧問に知らせるべく、動けぬ自分に代わり淡海の教師でもある娘の塚本ぬいを上京させた。

嘉悦は非常に驚いたが、震災の直接被害を受けたため、身動きが出来なかった。そして、ぬいは下田にも同じ話をした。下田の想いも一緒であったが、暫くぬいを待たせ、発した言葉は、次の様であった。

「顧問の役目はかような時こそその立場である。今日女子教育に従事する者は、知識ばかり授けるばかりが能ではない。生きた手本のおばあ様(さとを指す)に疵をつけてはならぬ。私が後を引き受けましょう。帰っておばあ様に安心下さるように伝えて下さい。」

さととは、ぬいから聞く下田の一語一句をかみしめるように、心の中に受け止めた。そして、女子教育の普及に並々ならぬ心情と熱情が、八十路を過ぎた老媪、苦悩する自分に向けられ、地方の女子教育が、中途挫折することに断固として立ち向かう姿が窺える。さとへのメッセージは下田自身の試練への答えでもある事が容易に

感じられると共に、下田の温情、友情がひしひしと感じられた。

大正十四年四月一日を以て、淡海は下田の手に委ねられた。手始めに東京の実践女学校(当時の呼称)との一体化を打出し、校名も「淡海実践女学校」と改められ、孤立した単一地方校でない魅力を持ち、実際に卒業生の東京校無試験入校や転校、編入を認めた。

十五年、県立神崎商業の旧校舎が県から無償で払い下げられ、又同年四月一日には高等女学校へ昇格、校名も「淡海高等女学校」になった。改革には地元の有力者が多く加わり、淡海協力が出来上がったことで、財政支援体制は整った。

下田は、地元のバックアップを背景に、淡海を再生させた。事実、昭和に入り、全国にある私立女子高等学校二百余校中、全国第二位の資産を持つ学校となり、質実共に名門校として入学者が殺到したとある。

最初の淡海の校主である塚本源三郎は、久邇宮家より厚遇を受けていた。良宮女王(昭和天皇の皇后)は数度、久邇宮、同妃殿下も再度来臨されている。校内には、宮家よりの拝領品が飾られ、生徒の目に触れ、自然と校風も品位があがっていた。

今日では、当時の淡海在校生だった方は、殆ど見られなくなったが、その子孫に当たる方々は母、祖母から学校生活などを聞かされている。淡海に在籍した事を誇らしげに話していたという。

戦後には、千登三子(十五世千宗室夫人・当時は塚本登三子)も大叔母さとの創設したこの学校に通っていた。

少し横道にそれるが、登三子夫人の嫡男、千宗之(現十六世千宗室)が亡母へのオマージュとして書いた「母の居た場所」執筆の為、聚心庵の旧塚本邸に取材で来られた。そこは、母である登三子夫人が戦中戦後の数年を過ごした家である。「主人の間」から借景に取入れられているきぬがさ(旧佐々木六角の居城観音寺城址がある)(注2)の話に及んだ折、自分たちが両親と京の衣笠山の麓に住まわれた事を回想し、字こそ異なるが「きぬがさ」に母はいかように思



母の居た場所

いを重ね合わせていたことかと追憶の中に書き綴っている。

また、下田やさとの和歌の同人誌も「きぬがさ」と、これも何かの因縁と思うのは、私だけであろうか。

さとは、こうした下田の学校運営を見届けて、感謝と安堵の想いを胸に昭和三年一月四日に彼岸へと旅立って行った。

享年八十六才であった。
辞世は二首(一首は後述)

われは子に慰められて なかなか
まことに 稚児にかへりけるかな

「下田歌子校長以降の淡海女学校」

淡海は、大正八年に女子実務学校として誕生し、昭和六十年三月九日、女子専門学校として閉校、六十六年の歴史に幕を下ろした。下田校長以降を迎ると、昭和五年に校長の責務を渡辺千次郎に譲っている。渡辺も教育の要職にあったが、この頃は引退しており、一度は辞退したものの、この学校の意義を受け、さとや下田の女子教育をよく伝えた名校長であった。

第二次世界大戦中はご多分に漏れず、勤労奉仕女子隊でミシン作業に従事した。終戦後は、学制改革、いわゆる六・三・三制の中に組み込まれて高等女学校を廃止、高等家政女学校となり、家政科、洋裁科、第二家政科に特化していった。同様に近郊の高等女子学校も公立高校と合併していった。

その中で昭和四十三年に創立五十周年記念を華々しく挙行し、学祖の塚本さとや二代目校長下田歌子を偲び、学校の意義を教職員共々顧みる行事となった。



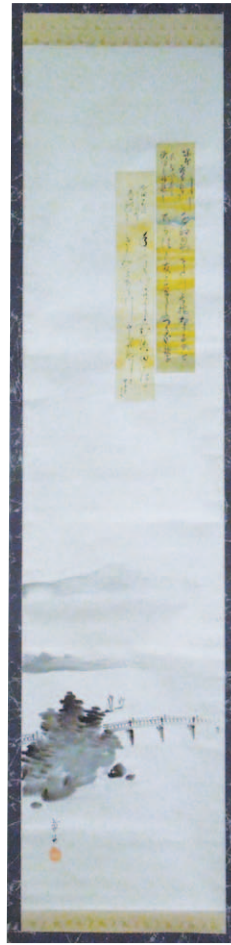
淡海50年史
(実践女子大学図書館所蔵)

この五十周年記念をエポックとして、最終は「淡海女子専門学校」と改称し、地域の女子教育に尽した。しかし、学制改革による影響は大きく、高等学校の増設などで昭和六十年に閉校し、その役割に終止符を打った。

今日、「地方、女子地位向上」と大きく叫ばれているが、先達として塚本さとや下田歌子が一世紀も前にその道を先導し、下田が女子大学へ進化させるための学校を創設した功績は多大である。その時代の人々の行動が、現代の土壌にあることは違いないと確信している。

終わりに、下田と共に地域の活動に専念した塚本さとをもう少し追想してみよう。

忙中閑ありともいえる、下田、嘉悦とさと三人で、琵琶湖の舟遊びを楽しんだ容子が、①の軸に短冊が残されている。



①舟遊び短冊(軸)
(実践女子大学図書館所蔵)



②桃実図の軸
(実践女子大学図書館所蔵)

また、②の軸には桃の絵を嘉悦が、和歌を下田、さとが詠み、認めている。

下田 歌子
「神崎の里の姫桃三千とせの

実を結ぶまで 生じたてなむ」
(神崎は川並の地方をさす。)

塚本 さと

「名に高さ教の親をしるべにて
我も学びの道とたとらむ」

よく三人が集うと歌を詠み、席画を描いて楽しんだようである。「紅屋二唄」にも掲載されている。

さとは著書も出している、歌集「月の影」は自作の和歌の集大成である。嫡子源三郎の妻に与えた「姑の餞別」という冊子



紅屋二唄
(実践女子大学図書館所蔵)

は、永年この地域の家庭の主婦の教科書であった。この二編について、明治のジャーナリスト徳富蘇峰は、さとの追悼文の中で触れているが序文と要約は「日本の国が女性に負う所多大なることは歴史の裏面に眼光の透る者は認識しないものはなからう」・・・中略・・・現女性は旧女性よりも優るものの旧時の女性の努力、奉仕の心は脱帽する・・・中略・・・ここに故塚本さと女史の遺著を紹介する。「姑の餞別」は家人に与えたものである。「年中行事」、「お惣菜」、「家事心得」、「病人介抱」、「家具衣装の手入」他、家政全般と細々に及んでいる。それは新式科学的家政学の教科書に及ばぬが家政に対する姿勢は新女性にも教訓たり得る。「月の影」は歌人下田女史の指導を得て秀作が多々であるが、その最後に詠んだ一首をここに掲げる

なにひとつ 思いおくことなかりけり
わが行先は弥陀任せて

気がかりだった念願の学校も下田の支援で軌道に乗り、一家中も何も思いおくことはない、ということをしているのであろう。

蘇峰は最後に、女性の教養も全てに堪能であったが、さとの本領は「奉公」、献身の一点であったろうと言葉を結んでいる。八十六年の生涯はそれに尽きる。今年（平成二十九年）は創設百年目にあたる。額田王の詠んだ歌と共にこの蒲生野に学校は消えたが、さとの志は広く育まれ、いつまでも人々に語り継がれていくであろう。

「後述」

下田先生と淡海を述べるにあたり、淡海の説明に伴い淡海関係者が多く、著名なる下田歌子先生の前に塚本さとや一族、その背景などを紹介する必要を感じて自然そちらにウェイトを置かざるを得なかった。その点深くお詫び申し上げる。内容もまだまだ深く追うことが多々あったが、共々に中途半端のそしりは免れない、重ねてお詫び申し上げます。

「独白」

淡海女子実務学校旧校舎は、大正初期に建てられたと聞き及ぶ。地震に耐えられぬ老朽化でそのまま人の手が入っていない。いずれ取壊しの運命になるのか、失ったものは二度と還らぬ。何とか維持出来ぬか方法とと思うが、寿命は今日明日はとも知れぬ所へ来ている。

周囲の声も聞かれぬのが残念。

犬山の明治村は、昭和十五年に取り壊された鹿鳴館を見た谷口吉郎（初代館長）が学友だった名鉄の土川元夫（社長・会長）に語らって、消えゆく明治の建造物を集めた。

現在多くの人が当時の面影を見出している貴重なものが多く、社会的意義を果たしている。塚本定次が海舟に語った話（氷川清話に語り継がれている）。

私は山に木を植えているが、それが育つ頃には私はいないでしょう。しかし、後世に役立つのであれば私は本望です。この話はあちこちで今日もよく紹介され話に使われるが、後世に残すことでは、明治村や淡海の校舎も同じではないかと思ひ、一人気を揉んでいる。

◆参考までに開校時に祝辞を頂いた方

杉浦重剛（倫理学者湖国出身）、佐藤昌介（北海道大学総長）、荒木寅三郎（京都大学総長）、釈宗演（鎌倉円覚寺管長）、鈴木大拙、徳富蘇峰（ジャーナリスト）、下田歌子、嘉悦孝

◆猶主なる出席者

地 元：藤井善助（注3）、松井吉右衛門 他大勢、
滋賀県県視学、八日市中学校校長 他

学校関係者：杉浦重剛、下田歌子、嘉悦孝

塚本一族：三代目塚本定右衛門、二代目塚本糸右衛門、
同塚本市右衛門、同源三郎 他

その他の関係者：河上謹一（注4）、伊庭貞剛

◆祝電

岡野敬一郎 他多数

<参考資料>

- ・『母の居た場所』千宗之（裏千家第十六世宗家）著 中央公論新社 平成12年2月初版 塚本邸を訪れた折の、母の追憶の中に書き込んでいる。
- ・私家版『姑の餞別』塚本さと著 淡海高等女学校 昭和6年
- ・私家版歌集『月の影』塚本さと著 徳集堂 昭和5年
- ・私家版『紅屋三翁二嬢』塚本源三郎著
- ・『ミュージズ塚本：170年のあゆみ』塚本商事編刊 昭和60年1月
- ・『凜として—近代女子教育の先駆者下田歌子』仲俊二郎著 栄光出版社 平成26年11月
- ・『妖傑 下田歌子』南条範夫著 講談社 平成6年10月
- ・『滋賀の20世紀』滋賀県企画課 滋賀20世紀編集委員会編 サンライズ出版 平成13年3月
- ・雑誌「日本婦人」
- ・同人誌「きぬがさ」、ほか淡海学校新聞等
- ・『学校沿革史』神崎ニュース社 昭和60年3月10日
- ・「女生と文化」第2号：実践女子学園下田歌子研究所 平成28年3月

（注1）嘉悦孝（一八六七～一九四九）熊本藩儒学者であった父より教えを受ける。明治三十六年（一九〇三）に女子商業学校を創設したが学校経営に苦しんだ。嘉悦大学学祖。

棚橋絢子（一八三九～一九三九）東京女子学園初代校長。明治の初め、女子師範学校で教鞭をとる。

河口愛子（一八七〇～一九五九）熊本県出身。明治初期の教育者。小石川女子高等学校校長。

（注2）織山：佐々木六角が近江の守護大名としてこの山に観音寺城を築いた。傘下には三井越後守（三越の前身）、蒲生氏郷、目加田稔次等の地元の豪族がいたが、織田信長の侵攻で破れた。今は西国の三十四カ所の観音寺の霊地となる。京の衣笠山と異名同音。

（注3）藤井善助（一八七三年～一九四三年）滋賀県出身、衆議院議員実業家。同郷であり、定次とは年代こそ異なるが交友関係があり、定次亡き後も一族の相談相手であった。

（注4）河上謹一（一八五六～一九四五）山口県岩国出身、日本銀行理事。後息子：河上弘一（興業銀行総裁）、甥：河上肇（社会主義者）。東大卒、請われて住友理事となる。住友総理事伊庭貞剛と共に塚本一族の家政全般の助言者。塚本家訓にも関る。

（とうとうひろのぶ ㈱ツカモトコーポレーション資料館 聚心庵館長）

岩村町婦人会から岩邑うた子会へ(2) - II ——戦後から現在までの経緯と清掃活動について——

愛甲 晴美

岩村町婦人会から岩邑うた子会へ

平成16年10月の市町村合併により、行政の支援も受けられなくなる状況で岩村町婦人会の存続は難しくなった。渡会直子氏(平成16年度岩村町婦人会会長、平成18年度より現在まで岩邑うた子会会長)に当時の経緯についてお話を伺った。

平成16年度に就任した渡会会長は、合併後の婦人会解散の賛否を問うアンケートを会員に実施し、解散に賛成との多数意見の結果をもとに、歴代の婦人会長へ解散の事情を説明するなど、会員の理解を得て、解散手続きを進めた。しかし、それまで婦人会が行ってきた下田歌子先生(以下下田)の顕彰碑周辺の清掃活動の今後については、解散の時点で決まっていなかった。行政が主体となって、各地区から人を選出してもらい、掃除を続けられるようにできないか相談したが、なかなか進まなかったとのことだ。

平成16年度の婦人会役員11名が翌年の清掃を行ったが、清掃活動を続ける新たな組織が必要であるとの総意から、同役員が発起人となり、「岩邑うた子会」(以下うた子会)の名称で、活動趣旨に賛同する有志を募ることになった。勧誘のチラシには「下田歌子女史誕生の地 岩邑に住む私たちは、女史の教えを学びつつ地域に生かし後生に語り継いで行くためにも、お墓守りと顕彰碑清掃を中心に親睦や女史の教えを学び合える会を立ち上げたい」と、下田に対する敬愛の念を設立趣旨としている。

平成18年5月に呼びかけに応じた73名でうた子会が発足し(発足時の名簿による)、規約に「下田歌子の墓守りと顕彰碑清掃を主とした目的とし」と定められた。会員を6組に分け、12月から3月を除く8か月を当番制で、現在まで清掃活動が続けられている。

現在の清掃活動とうた子会について

今回の調査に関連して、うた子会の現在の活動状況を知るため、平成28年8月9日に、筆者もうた子会の清掃活動に参加させていただいた。うた子会の6つの組はそれぞれ組名があり、今回の当番はすみれ組で、参加人数は14名だった。また、清掃後、すみれ組の皆さんと、渡会会長、うた子会発起人で構成された柊会(ひいらぎかい)の方々も交えて、同会の現在と今後の課題について、お話を伺った。

顕彰碑周辺の清掃は午前8時から、晴天で、すでに気温が高い中行われた。今年度から草刈り機で刈る作業をシルバー人材派遣に委託していたので、刈られた草を掃き集めて袋に

入れる作業から始め、顕彰碑へ通じる石畳やその周囲、さらに勉学所周辺の草取りも行った。石畳は急な坂になっており、炎天下の上り下りや腰をかがめた作業が続いた。昨年までは草刈り機も会員が使っていたことを考えると、作業の大変さが推し量られた。

顕彰碑周辺を終わらせた後、墓所及び墓所までの階段、通路の清掃を行った。すみれ組の方々は、当番の時に久しぶりに顔を合わせるのを楽しみにしているとのことで、清掃活動が会員の交流の場となっていることを実感した。2時間あまりの作業を終え、最後に全員でお墓参りをして作業を終了した。



下田顕彰碑周辺の清掃の様子

清掃後、渡会会長、すみれ組の中で残ってくださった数名と、柊会からも4名ご参加いただき、お話を伺った。

うた子会は清掃活動のほか、年1回の総会と研修旅行を行っている。また、下田についての勉強会もこれまで何回か開催し、講演などを通して理解を深める努力もされている。活動費用は、実践女子学園からの礼金以外に補助は受けていない。婦人会から引き継いだ繰越金を不足分に充てている。会員の高齢化が進み、特に暑い時期は重労働になるため、実際には名前だけで参加できない会員も増えているのが現状とのことだ。今年度から草刈り機を使った作業は外部委託したので、負担は軽減された。しかし、現在の礼金を委託料や燃料費などに充てれば、必要経費も問題となり、活動を今後存続できるか不安があるとのことだった。

岩村では、昭和60年に岩村城築城800年祭が開催され、女城主に本学卒業生の渡辺美佐子氏が就任した。この頃から改めて、郷土の偉人の一人として下田を顕彰するようになったが、現在の若い母親世代の人たちは、下田にも清掃活動にも



墓所前にて岩邑うた子会会長とすみれ組の皆さん

関心が薄い。またそうした世代の人を勧誘するにあたり、うた子会に入るメリットは何かという質問を受けるが、説明が難しいとのことだった。こうした現状で同会は新会員の加入が進まないことが大きな問題となっている。

現在は小中学校で先人教育が行われ、その中で岩村の偉人の一人として下田歌子を学んでいる。子ども達を清掃活動に参加させてはという話もあったが、現実的には安全管理など難しい面がある。将来的には期待もあるが、保護者世代に何らかの形で下田を知ってもらい働きかけが必要とのことだ。下田を顕彰する事業として、下田歌子賞が設けられて14回目(調査時)になり、全国規模で下田歌子を知って貰うきっかけとしては一定の役割が果たされているといえる。

平成28年はうた子会結成から10年目であり、5年後を節目として存続させるかどうか検討中という状況にある。市町村合併後、下田関連事業を企画実行していくためには、なお一層恵那市の理解を得る必要があり、岩村でも下田について広く知って貰うための方策を、さらに考えていかなければならないということだった。

おわりに

岩邑うた子会の方々が顕彰碑や墓所の清掃を定期的にされていることを知ったのは、下田歌子研究所が学園のプロジェクト研究として設置され、非常勤研究員として岩村に関わりを持つようになった平成24年頃のことだった。

その後調査等で岩村を訪問した際に、清掃活動が岩村町婦人会時代から、長い年月にわたって受け継がれていたことを教えていただいた。いつ訪れても、顕彰碑や墓所が美しく保たれているのは、地元の女性の方々の陰の努力の賜物であることに深い感銘を受け、また、この活動の経緯がほとんど知られていないばかりでなく、その存続の危機に直面している事実を目の当たりにした。本学園としても、学祖の顕彰碑周辺が学園の所有地であることも含め、今後どのように保存していくかを真剣に考える時期が来ているのではという思いを強くした。

清掃活動の経緯を明らかにすることは、下田の存在を、岩村の女性がどのように受けとめて来たのかを知ることにもつながる。活動記録の手がかりを探していたところ、婦人会に関する資料が保管されているとの情報を得て、調査させていただけることとなった。

そして、記録を繙くうちに、下田が岩村を訪問した大正10年、昭和10年の婦人会との関わりも少しずつ明らかとなった。岩村でもすでに忘れられていたようだが、顕彰碑設置にあたって、婦人会が示標を建てる費用を捻出するために、会員の髪の毛をおよそ40回にもわたって集めたという事実も確認できた。そうした思いが清掃活動を始める原動力だったといえよう。

戦後の婦人会は組織力を高め、会員も増加し、活動の幅を広げて地域社会の発展に大きく貢献していった。戦後の婦人会で会長を務められた浅見弥生氏、後藤歌子氏、渡会直子氏から、当時の婦人会活動の一端を伺うこともできた。

その後、婦人会に対しての考え方も変化し、会員が減少していく中でも、顕彰碑周辺の清掃活動は続けられていた。下田を郷土出身の偉人として敬慕し、誇りに思う気持ちは、現在まで岩邑うた子会という形で受け継がれ、清掃活動は今年で81年目を迎える。

今回は、膨大な資料の一端を紹介するにとどまった。この報告が、岩村の女性によって、下田歌子先生がどのように受け止められてきたかを知る一助となれば幸いに思う。また、清掃活動の今後を、地元の方々と一緒に考える契機としていただき、具体的な方策につながることを期待したい。

さらに、岩村の女性が自主的に学ぶ機会をつくり、岩村町のあゆみの中で、様々な活動を通して地域社会に大きく貢献してきたことを示す貴重な記録である婦人会資料が、岩村の歴史的財産として適切に保存され、詳細な調査が今後も進められることを願ってやまない。

謝辞

この貴重な婦人会資料を調査するにあたり、あらゆる便宜を図ってくださった岩村コミュニティセンターの中根敏雄館長、調査にご協力いただいた浅見弥生氏、浅見章氏、後藤歌子氏、渡会直子氏、岩邑うた子会すみれ組・柗会の皆様、西尾精二氏、西尾孝子氏、藤井雅子氏、神谷悦子氏、恵那市岩村振興事務所、下田歌子研究所客員研究員の鈴木隆一氏、若森慶隆氏に心より感謝申し上げます。

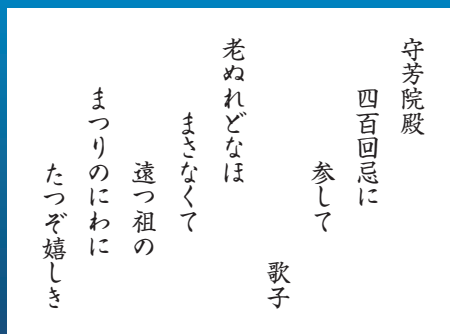
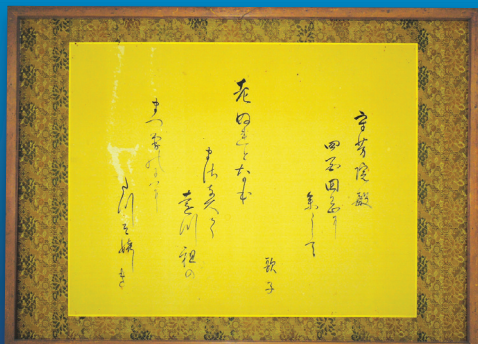
*前回のニューズレター No.8の拙文の中で、婦人会資料のタイトルと、記事の年代が一致しないのではとのご指摘をいただいた。婦人会資料は表題の年度と内容が合わないものが多く、おそらく最初に綴じた年度に翌年以降も綴じ合わせていったものが多いのではないかと思われる。はじめに記したように、資料名は表紙の記載どおりとしたため、誤解を招く表現となったことをお詫び申し上げます。

(あいこうはるみ 実践女子大学下田歌子研究所 客員研究員)

寄贈資料紹介

下田歌子研究所では、下田歌子関連資料及び学園史資料の収集・保管とデジタル化事業を行っています。2016年度に本研究所に寄贈されました、下田歌子先生の直筆資料の一部をご紹介します。

扁額「守芳院殿 四百回忌に参して 歌子」(下田歌子先生直筆)



寄贈者…平尾三郎様、平尾聡様
寄贈日…二〇一六(平成二十八年)年十二月十七日

ニュースレター No. 8 で紹介された守芳院を下田先生が1920(大正9)年に訪れた。その時に詠んだ歌を下田先生から平尾正三氏(三郎氏の祖父)が貰い受けたものとみられる。

参考資料：1) 榊澤龍吉『平尾守芳とその一統 郷土を拓いた戦国武将』(株)樫 1987(昭和62)年
2) 奥島尚樹「平尾大社と守芳院(佐久市)」ニュースレター vol.8 2017(平成29)年 p7-8 下田歌子研究所

下田歌子研究所では、学園の歴史や下田歌子先生の事績がわかる資料収集に力を入れています。下田先生ゆかりの品や学園の歴史がわかる資料で、ご寄贈可能なものがございましたら、下田歌子研究所までご連絡ください。

下田歌子研究所事務室

電話/Fax 042 - 585 - 8945

Mail shimoda-ins@jissen.ac.jp

新編下田歌子著作集『女子のつとめ』刊行



『女子のつとめ』

現在、下田歌子先生の著作は絶版となっています。日本女性の生き方を真摯に考えた下田歌子の思想を改めて見直す糧として、重要性の高いものから、その著作のデジタル化を行うと共に、著作の復刊を目指しています。新編下田歌子著作集と銘打って、平成27年度は『婦人常識訓』、平成28年度は『女子のつとめ』を刊行しました。

新編下田歌子著作集の装丁は、昭和10年、下田歌子先生が生誕の地である恵那市岩村に建立された「下田歌子先生顕彰碑」の除幕式に出席した際に、人々に帰京のお土産記念品として配った「春月の歌とりんどうの風呂敷」をモチーフに制作しました。りんどうは『下田歌子著作集 香雪叢書』の装丁にも使われています。



『下田歌子著作集 香雪叢書』
(実践女学校出版部 1933.3)

下田歌子研究所は、下田歌子先生の建学の精神を踏まえ、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し、それを資する施策・思想を社会に発信していきます。

下田歌子研究所研究員(平成29年4月1日現在)

【所長】 湯浅 茂雄
【兼務研究員】 広井 多鶴子 高瀬 真理子
【客員研究員】 愛甲 晴美 久保 貴子 小林 修 鈴木 隆一
関 登美子 竹内 整一 松下 寿久 横山 幸司
若森 慶隆

今年度の活動予定

6月 ニュースレター No.9発行
8月 研究会
9月 「学長と行く、学祖故郷の旅」
10月 渋谷キャンパス常磐祭(講演・展示)
11月 日野キャンパス常磐祭(展示)
1月 ニュースレター No.10発行
2月 「下田歌子研究所年報」第4号発行
3月 新編下田歌子著作集『女子の心得』刊行

『ニュースレター』No.09

発行：2017年6月29日 編集・発行所：実践女子大学 下田歌子研究所

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp

印刷：日野テクニカルサービス株式会社